

国語科

学習者の世界を広げる「言葉」の学び

司 会 者

信木伸一

指導助言者 広島大学大学院教育学研究科教授 竹村信治

はじめに

私たちは、一人一人の「ものの見方」によって各人の世界が規定されている。その「ものの見方」が、他者の「ものの見方」を獲得しただけのものであっては、私たちの世界はいつまで経っても借り物のままでしかない。いったん獲得した「ものの見方」を自ら問い直すことを通して、私たちは新しい世界を本当に自分のものにしており、その自らを問い直すという過程は、「言葉の学習」によって具体化されるものであろう。

当校国語科では、これまでも中・高の校種や、現代文・古典などの領域を超えて、教材(テキスト)の表面に現れている主題・主張を追うだけでなく、生徒の「ものの見方」そのものを広げる「言葉の学習」をめざしてきた。過去3年の「サイエンスプログラム」では、「科学的思考力」や「論理」ということに重点を置いて実施してきたが、今年は新たに「リテラシー」という観点も加えて、生徒たちの「ものの見方」、「世界」を広げる学習のありかたに迫ってゆきたい。もとよりこれは、研究開発「新サイエンスプログラム」に限らず、私たちが日常の国語科の授業を通して目標としていることである。

本研究協議では、「新サイエンスプログラム」と国語科の授業との関連を切り口として、国語科の授業で目指すものについて明らかにしてゆきたい。

1. 国語科の授業と新サイエンスプログラム

(1) 新サイエンスプログラムの全体像

—中等教育における科学を支える「リテラシー」の育成を核とする教育課程の開発—
※「リテラシー」の考え方について

(2) 新サイエンスプログラムⅡ—総合的な学習の時間で、国語科が取り組む内容

(3) 新サイエンスプログラムⅢなど—毎日の国語科の授業を通して、国語科が取り組む内容

2, 研究授業

(1) 1限 古典の学習を通して、現代に生きる意味を考える。

1年B組 授業者 金子直樹

(2) 2限 「こころ」を読むー「負い目」の問題をめぐってー

(サイエンスⅢ)

5年D組 授業者 石井希代子